

X. ゴール型「サッカー」の授業づくり（平成26年度の取り組みより）

X-1. 小学校（清水）

授業者：清水 由 学習者：小学校3部3年児童40名（男子20名・女子20名）

1. 小学校期の「サッカー」につながる運動の考え方

小学校学習指導要領解説体育編での「サッカー」の扱いは、ゴール型のゲームやボール運動の学習内容を学ばせるいくつかある教材のうちの1つとして例示されている。中学年ではゴール型ゲームとしてラインサッカーとミニサッカーが例示されており、高学年ではゴール型ボール運動としてサッカーが例示されている。小学校では、サッカーを教えるという立場ではなく、サッカーという素材を教材化することによってゴール型の学習内容を子どもたちに学ばせようとする。

小学校期に体育授業で扱う教材の中で「サッカー」は、個人技能の難度が高いもののうちの1つである。そのことから、体育授業で扱える学習内容にも限界があると考えている。「サッカー」でゴール型ゲームやボール運動の学習内容に迫るには、複雑な教材化と多くの時数が必要であろう。現行の体育授業時数では、難しいと言わざるを得ない。

本研究会では、小学校期の位置づけを「動きづくり・感覚づくり」としている。そういった意味では、サッカーにつながる動きとして「蹴動作」を大切にしたい。「蹴動作」そのものは、重心移動やひねり動作、ムチ運動といった多くのスポーツに応用できる基礎的な動きの1つとして身に付けておきたい動きでもある。また、ゴール型の基礎として鬼遊びでの動きや駆け引きが小学校期に潤沢に経験させておきたい学習内容でもある。本時の2つの教材は、2～3年生の時期に学ばせておきたい教材である。以下に概要を述べる。

鬼遊びで身に付けたい動きは、周りを見ながらぶつからないように走ることと、相手を抜くために緩急をつけたり方向転換をしたりしながら走ることである。一定の方向を目指しながら入り乱れて走ることによってゴール型へつながる動きを身に付けることを狙いたい。ボール蹴りゲームでは、楽しみながら蹴動作の頻度を保証することを主な狙いとする。ボールを足で扱うことは非日常であるため、授業で頻度を保証することは重要である。付加的にボール運動につながる「相手との駆け引き」も工夫させていく。

2. 活動計画

オニ遊び「ドラキュラ」 20分×5回程度

緩急や方向転換をつけた走りの習得をねらいとする

ポイントは「オニとの駆け引き」（相手の状況や自分の状況に応じた判断）

ボール蹴りゲーム「たまご割りサッカー」 20分×8回程度

蹴動作の習得と相手の状況に応じた工夫をねらいとする

ポイントは「蹴る瞬間に足首に力を入れる」「相手の左右の空いている方をねらう」

3. 公開授業概要

単元終了後、1年間の期間をおいての特別授業。運動のやり方やポイントを思い出す。ゲームのルールと安全上の留意点、ぬかるみに注意する、無理をしてケガをしないさせない、言い合いになったらジャンケンかやり直し、といった点。ドラキュラでは、途中で自分の走り方の工夫の他、回りの子の走る状況を見てオニの意識が逸れたときに走り出す工夫の意見が出された。たまご割りサッカーでは、守りの形について一直線や菱形といった工夫を確認した。楽しみながらさまざまな走り方や蹴動作の習得をめざした。

X-2. 中学校（國川）

授業者：國川聖子 学習者：2年5組 女子生徒21名

単元名 サッカー

1. 本単元の概要

中学校期初めてのサッカーの学習である本単元は、ボールを足で扱うという他の種目にはない動きの面白さに触れ、仲間との協力の仕方を工夫しながら少人数でのゲームを楽しむ活動を中心に構成した。授業では、生徒たちが今持っている力で、ボールを「蹴る」「止める」「運ぶ」を繰り返し、ボールをもっている仲間に協力する動きでいかにゴールをねらうかを楽しみながら学んでいくことを重視している。

単元を通して、「今持っている力の分析」「どんな楽しみ方をしたいか」「改善点はなにか」を繰り返し話し合いながら、一人ひとりが積極的にゲームに参加できるように活動を進めることとした。

2. 公開授業概要

1) 位置づけとねらい

本時は、ボール慣れ、ストリートサッカーの4時間目にあたる時間である。

1時間の中で、自分たちの課題を見つけ、今の自分たちの力に合わせて、その課題を解決するためのルールを生徒同士で工夫してゲームを行った。

生徒たちに共通して提示したルールは、ボールは1つ、カラーコーン二つの間をボールが通過したら1点、手を使ってボールを操作してはいけない。また、ゲームが連続し楽しめるゲームへの工夫を目指すことと強調した。

この活動を通して、「ルール」の存在の重要性、遊びのようなシンプルな運動の中に少しの決まりごとがあればサッカーを楽しむことができることへの気づきを得ることができた。また、「規制と自由」の価値観に違いがあることも授業の中での面白い発見であった。

2) 本時の目標

- ・インサイドキックやアウトサイドキック、インステップキックなどを用いて、ドリブルでボールをキープする力を高める。
- ・ボールだけでなく周りの仲間や状況を見ながら、ボールをつなぐための工夫に気付くことができる。
- ・仲間と名前を呼び合ったり、励まし合ったりして声をかけあい、積極的にゲームに取り組むことができる。
- ・自分で考えたり、チーム同士で話し合ったりしてルールを工夫し、その成果と課題について、具体的な場面をあげて振り返ることができる。

3) 授業展開

①ボール慣れとパス練習

- ・2人組で対面パス練習（キックのいろいろ）
- ・クラス全員が入り乱れて行う両手パスとキックでのパス（名前を呼ぶ場合と名前を呼ばない場合の違い）

②マイチームルールを確認し、ゲームを行う。

③ゲーム後、自分やチームの課題と解決に向けての具体策を話し合い、再度ゲームを行う。

④ゲームを振り返り、本時のマイチームルールの工夫への成果と課題を確認し、次時のマイチームルールと目標を定める。

X-3. 高等学校（中塚）

授業者：中塚義実 学習者：2年6組男女（男子21名、女子19名、計40名）

単元名 サッカー — 男女で上手に“遊ぶ”ために

1. 本校における「サッカー」単元の位置づけと概要

1) 1年次に男女それぞれ15時間程度の必修単元がある。

即席のストリートサッカーからフットサル、最後は半面（男子は全面）でオフサイドルールありのサッカーを体験する。教室でサッカーの歴史やゲームの見方も学習する。

2) 3年次前期に10～15時間の男女共習選択単元がある。

「男女で、サッカーを、徹底的に楽しもう」をスローガンに掲げ、3つの間（時間、空間、仲間）を意識しながら自分たちで計画を立てて授業を進めていく。主に雨天時、教室での授業では国内外のサッカー環境を学ぶ。「ささえろ」がキーワード。

3) スポーツ大会（校内球技大会）の種目として男子はサッカー（7人制）、女子はフットサルを選択できる。9月の授業で5～8時間、自分たちで計画を立てて練習に取り組む時間がある。

2. 公開授業概要

1) 位置づけとねらい

2年次にサッカー単元は置いておらず、1月20日にプレ授業を行っただけの単発授業である。2年生の授業は男女別に行っているが、今回はあえて男女共習とした。「違い」を踏まえて上手に“遊ぶ”ことを本時のねらいとしたためである。1年次のサッカー単元の復習（ボール操作やゲームの進め方など）と3年次の選択実技の導入、および「サッカーの授業で何を学ぶか」の問題提起を含んでいる。

2) 授業展開

0～4分 ... 集合・点呼・本時の位置づけとねらい

4～16分 ... ウォーミングアップ／ボール操作のドリル

- ・シャドウラン（2人組でフリーラン。後ろの者は前の者の動作をまねして走る）
- ・シャドウドリブル（シャドウランをドリブルで）。密集ドリブル（ここまでは各自ボール1個）
- ・2人組でパス・トラップ（男女で）。ボールの取り合い（男女で）

16～24分 ... ゲーム① 4対4のストリートサッカー

男女混合で4人組を作る。対戦相手を探し、コーンをゴールにして立て、準備ができたところから4対4のゲームを行う。広さ（ラインはあるのかないのか）、ゴール方法（前方からのみなのか。高さはどこまでか）などはそれぞれで相談して決める。

24～46分 ... ゲーム② クラス内2チームによる半面サッカー

クラス内2チームの対抗戦。男女混合ゲームと男女別ゲームを行い、総得点で競い合う。オフサイドルールあり。ゲームに出ていないときは全員で副審を務める

- ① 男子のみ（約5分） ... 女子が副審を務める（主審は授業者。以下同様）
- ② 女子のみ（約5分） ... 男子が副審を務める
- ③ 男女混合（約8分） ... 人数は10対10。随時交替する

46～50分 ... まとめ

- ・ボール操作のスキルはサッカーを楽しむ上で重要。獲得するのに時間がかかるが、やればできる
- ・ボール操作が上手にできなくてもサッカーを楽しむことはできる。どんなレベルでもゲームが成立するのがサッカー。だから世界中で愛されている。
- ・上手に遊べるよう、頭を使って工夫しよう。大切なのは“遊び心”。「よく遊び、よく学べ」

【参考：参観のための視点－研究協議で取り上げたいこと】

(研究会当日の配布資料に掲載したもの)

以下の「視点」は研究協議の「論点」でもあります。参観の際にご活用ください。

1. サッカーの授業では「いつ」「何を」学ぶのか？

小学校 ... 「動きづくり」「感覚づくり」 + ゲームの楽しさ

中学校 ... 「場に応じた活動の工夫」「集団での課題解決」 + ゲームの楽しさ

高校 ... 「文化として・生涯スポーツとしてのサッカー（する、みる、語る、ささえる）」
+ ゲームの楽しさ

このような過程で、サッカーの“遊び方”と“遊び心”を学んでいく

2. 授業の中での「練習とゲーム」「運動と話し合い」のバランスは？

1) 「練習」と「ゲーム」のバランス

小学校では個々の練習にゲーム形式（ドリルゲーム、タスクゲーム）が取り入れられている。

中高では反復練習もするが「ゲーム」（ここでは「サッカーのゲーム」の意）の時間は確保する。

どんなレベルでも「ゲーム」が成立するのがサッカーの特徴。しかし「ゲーム」ばかりだと本当に伝えたい内容が伝わらない可能性がある。

2) 「運動」と「話し合い」のバランス

体育実技では運動量をしっかり確保したい。と同時に、運動をより効果的に進めるための「理論学習」「話し合い」「みて学ぶ」時間も確保したい。

3. 個人差（性差／経験差／技能差）にどう対応するか？

1) 個人差をどう捉え、授業に反映させるか

・「差」を縮めるために → スキルアップのための練習の工夫

・「差」を楽しむために → ゲームにおけるルールの工夫

2) 個人差が大きい「体育の授業」でできることは何か？

うまくなるには時間がかかる。体育の授業以外の時間（休み時間や放課後）が重要。

では体育におけるサッカーの授業では「いつ」「何を」学ぶのか？

4. 「ゴール型球技」としてのサッカーの可能性と課題

1) 「ゴール型」に位置づけられる球技の中で、サッカーが担うべき内容は？

2) 競技としてのサッカーと体育の教材としてのサッカーを、「違う」ものとして捉えるのか、「同じ」だと考えるのか。

＜以下は、第3回授業者ミーティング報告より＞

・体育の授業と競技団体が扱うサッカーは別物なのだろうか。体育の授業と部活動は違うという言説同様、あまり「違い」にこだわると本質を見失う。対象者が異なり、目的が異なるだけで、やっていることは同じサッカーである。難しく考えることはない。競技団体が進めるサッカーも体育のサッカーも、ともに、高い教育的意義を含んでいる。それは歴史が証明している。